くにざかいの記録

沢田 猛

伝統と現代社

くいざかいの記録

沢田　猛

伝統と現代社

＜著者略歴＞

沢田猛（さわだたけし）
1948年東京都生まれ。1975年毎日新聞社入社。
現在，同社静岡支局に勤務。静岡大学講師。静
岡県近代史研究会会員。

くにざかいの記録　定価一八〇〇円

一九八一年十一月十日初版第一刷発行©

著者　沢田猛
発行者　巌浩
発行所　伝統と現代社
発売所　現代ジャーナリズム出版会
〒162　東京都新宿区市ケ谷田町二―一―五
電話　(03)二六九―七六九七
振替　東京五―五二九八六

印刷　港北出版印刷
製本　豊文社製本

0025―2069―19914

くにざかいの記録・目次

はじめに 7

道の章

青崩峠 12

糸取り女たちの詩——くにざかいの女たち 16

冬の青崩れ 16　十五歳の春は厳しく 18　乙女たちの青春 24

宿の夜 26　夭折した姉よ 29　ムラに病魔が…… 30

アイヌウタリの誇り——飯田線秘話 38

街道を往く——信州街道今昔 48

嫁の通った道 48　学校へ通う道 50　浜しよいの通った道 52

信仰の道 56　早太郎の通った道 60

トッタカ挽歌 62

せしょう 73

いま、分校は 78

谷間のともしび 78　五月の空の如く 84

祭りの章

しずめの涙——西浦の祭り・静岡県磐田郡水窪町西浦 88

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

祭りの分布——信三遠くにざかいの神事芸能 102
それ舞え、テホヘ——川合花の舞・静岡県磐田郡佐久間町川合 107
反閉に群れる——東栄町月の花祭り・愛知県北設楽郡東栄町月 113
榊鬼が語る——湖底に沈んだ曽川花・愛知県北設楽郡豊根村曽川 119
神楽の里に咲く花は——大谷の御神楽・愛知県北設楽郡富山村大谷 124
闇に舞う火の粉——坂部の冬祭り・長野県下伊那郡天竜村坂部 130
雪の中の「らんじょう」——新野の雪祭り・長野県下伊那郡阿南町新野 138
おじろくおばサの呻吟——霜月祭り・長野県下伊那郡南信濃村八日市場 148
祭りの復権——暮らしの中からムラの自立を考える「遠山常民大学」の試み 154

川の章

猛くゆたかに川は流れた——天竜川物語 160
プロペラ船栄華の夢 160　筏師のつぶやき 164　川の人生 171
近代化のツメ跡 176
パルプの町 176　共有山の悲劇 182
ムラの墓標——万古の里 186
日本残酷物語 194
ダムとの闘い 194　シーシュポスの岩 203　断章 206

天竜峡よ、再び——自然破壊との闘い　209
誰か故郷を想わざる——佐久間ダム異聞　216
あとがき　224
参考文献　228
資料提供・取材協力者　230

くにざかいの記録

凡例

(1)写真説明に＊印を付したものは、提供写真。提供者の氏名は略した。それ以外は、著者の撮影によるものである。

(2)年号は、便宜上、元号を使用した。

(3)文中の取材協力者の年齢は、昭和五十五年十二月現在のものである。

はじめに

諏訪湖を源流とする天竜川は、南アルプスの西に沿い、中央アルプスが聳え立つ伊那谷を南下し、遠州灘へと注ぐ。総延長二百十六キロ、その間に大小二百近い支流を集める。天竜川を竜にたとえてみれば、ちょうど腹にあたる部分が、全流域を通じて一番山が深く、一般世間に遠い。天竜川はその腹にあたるところで、静岡・長野・愛知の三県にまたがって流下している。奥天竜地方に鋭いメスを刻み込んだような峡谷や重畳する山なみは、現代文明に〝汚染〟されるのを遠ざけてきたともいえる。こんなところが〝秘境〟といわれる所以かもしれない。

この山深い谷筋には毎年、晩秋から新春にかけ、天竜川を縦軸に花が咲いたように、古来から伝わる神事芸能に根ざした祭りが咲き誇る。その祭りの名称はさまざまでも、いずれも奥天竜という地理的条件に規制され、似たような特色を持っている。

ところで私がこの山峡に初めて足を運んだのは、いまから二年前の二月十四日の晩だった。北遠地方といわれる静岡県磐田郡水窪町西浦で毎年、旧正月十八日の月の出から翌朝の日の出にかけ、夜を徹して行われる西浦の祭りを見物するためだった。「西浦の祭り」は一般に「西浦の田楽」という呼び名で親しまれている。「西浦の田楽」を一躍有名にさせたのは、歌人で民俗学者として知られた折口信夫だ。

この祭りで私を強烈にとらえたものは、太鼓や横笛のうんざりするほど単調なリズムにあっても、なぜこう厭きさせないのか。単調なリズムの繰り返しはやがて興奮と陶酔の世界へさえいざなっていったこと。舞手同士のかけ合いには、万葉歌にみられるような古代人のおおらかな笑いさえうかがえたこと。こうした感動を呼び起こす厳粛、情熱をはじめとする宗教色豊かな中世芸能が、営々と時代の変化に崩されず継承されてきたのは、いっ

たい何によるのだろうか。私は素朴にそう思った。そして、その後、「西浦の祭り」が長野県下伊那郡阿南町で行われる「新野の雪祭り」と同じ田楽としての共通点があり、両田楽を結びつけるのに、静岡・長野県境にある青崩峠（標高一、〇八二メートル）が一役買ったのではないか、ということを聞くに及んで想像力をかき立てられた。

この祭りが契機になって私は天竜川水系の川筋や谷筋に咲くくにざかいの祭りを見に行くようになった。峠を媒介にした祭りの関連性に興味をそそられたからでもある。およそ十年にわたる登山経験で得た何十、何百となく峠を越えた経験から、峠の持つ意味に関心を持たざるをえなくなっていた。

県境域に私はぐいぐいと引きづられていった。歩き回るうちに青崩峠がかつて製糸工場へ糸取り女として働きに出る女工さんたちの行き交った峠であったことを知った。県境域の寒村に育った乙女たちが、大正から昭和にかけ、それこそ一体となって雪景色の青崩峠を登り降りした、という事実を当時を知る老婆たちから初めて聞いたときは衝撃的だった。しかも浮沈の激しい生糸相場、乙女たちは好不況にもて遊ばれるように、青崩峠を軸に信州へ、あるいは遠州、三河へ両極分解していったのだ。日本の資本主義発達史の〝縮図〟といえるような、野麦峠がここにもあった。県境域を踏査する拍車はますます加速度を増した。

こうした取材を重ねるうちに、私はある疑問を抱くようになった。というのは、県境域は既成の権力構造の枠組みを越えた、あるまとまりのあるゆるやかな共同体的形態をとっていながら、これまで行政区分がネックとなって、個々ばらばらに語られ、書かれることが多く、こうしたとらえ方は、県境域のかかえる問題を見落としてしまうことになりはしないだろうか、ということだ。このズレを何とか埋め合わせる方法はないだろうか、と思った。

静岡・長野・愛知各県の行政区分から見れば、県境域はいずれも「辺境」地帯だ。「辺境」は一般に好奇心と軽蔑の意味を持って「中央」から見下ろされ、また教育、医療、道路などどれをとっても、終始、行政の〝吹き溜り〟のような位置に甘んじてきた。言い換えれば、県境域は矛盾の〝縮図〟ともいえる。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com

踏査することでさらにはっきりしたことは、民俗芸能の宝庫とされるくにざかいに咲く祭りが、観光的色彩を濃くしはじめてきたことだった。忍び寄る過疎の打開策として浮上してきたのは、やはり、祭りの観光化だった。ダム建設に伴う集落の水没や、観光化の波に乗り切れず、廃絶を余儀なくされた祭りもある。

祭りを見る側から見られる側に視点を変えたとき、山あいの厳しい生活風土の中から萌え出た祭りが、内部において崩れかかっているシビアな現実が、意外なかたちで進行していることにショックを受けた。私はそこに舞手の嘆きや過疎の声を聞いた。

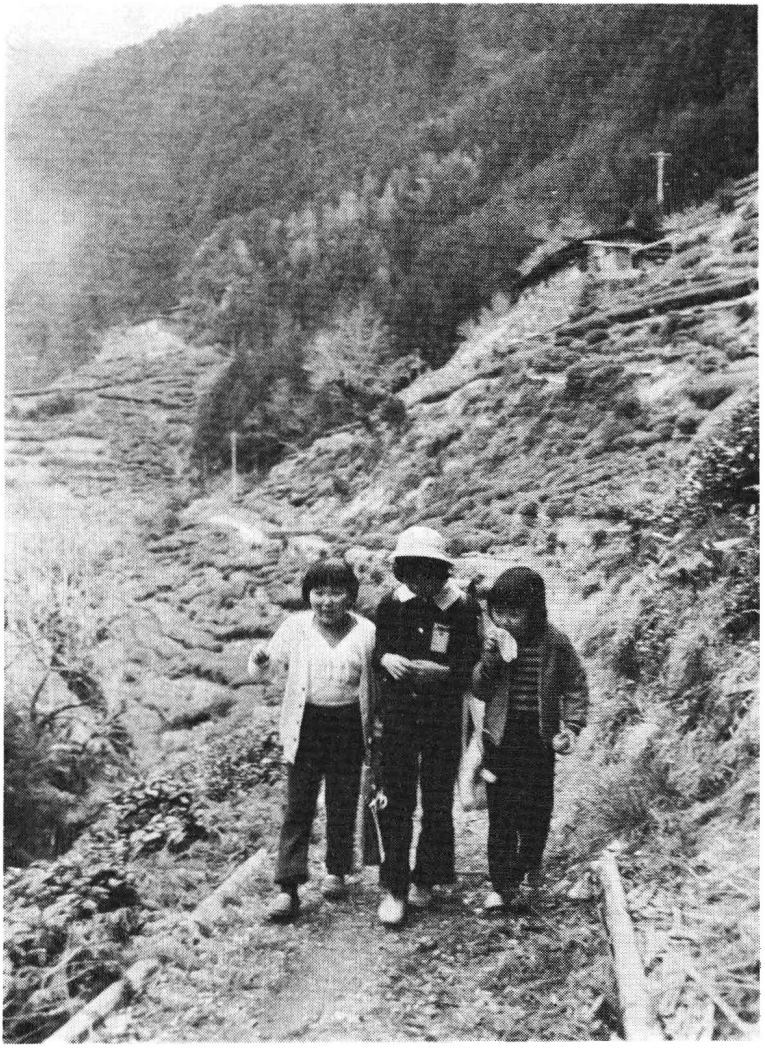
こうした思いはいつしか怒りに変わった。なぜなら、現代においてもなお、県境域は「中央」から〝秘境〟視され、また縦割りの行政区分の上からは「辺境」地帯とされ、各県ごとにばらばらに取り扱われており、地域を見据えていく視点が確立されていない、と思えてきたからだった。

そこで私はこの県境域をむしろ「中央」に据え、県境域を行政区分という〝尺度〟にとらわれずに、あるまとまりのあるものとして記録できないだろうか、と考えるようになった。県境域が「中央」に果たした役割は大きいのだから、県境域という方法論を軸に、県境域のかかえる現実を再構成してみることはできないだろうか、と。

再構成していくうえで、その柱に道と祭りと川（天竜川のこと）の三つを選んだ。くにざかいの道と祭りと川は、それぞれ密接に結びついており、生活風土もまたよく似ている。しかし、道と川には開発による荒波が、祭りには過疎の嵐が、といった具合に、県境域には現代という顔が、わがもの顔に濶歩（かっぽ）している。

日本の経済成長のシンボルとして一世を風靡（ふうび）し、天竜川をせき止めて建設された佐久間ダムが完成してから、ことしではや四半世紀を迎えた。この間にくにざかいのマチやムラは、日本の典型的な過疎地帯になってしまった。県境域という方法論を軸に、〝秘境〟といわれてきた県境域のかかえる現実を、暮らしの中から記録してみようと思い立った。これは「辺境」地帯から「中央」への私のささやかなレポートでもある。

道の章



信州街道を帰宅途中の佐久間町立山香小学校の児童たち

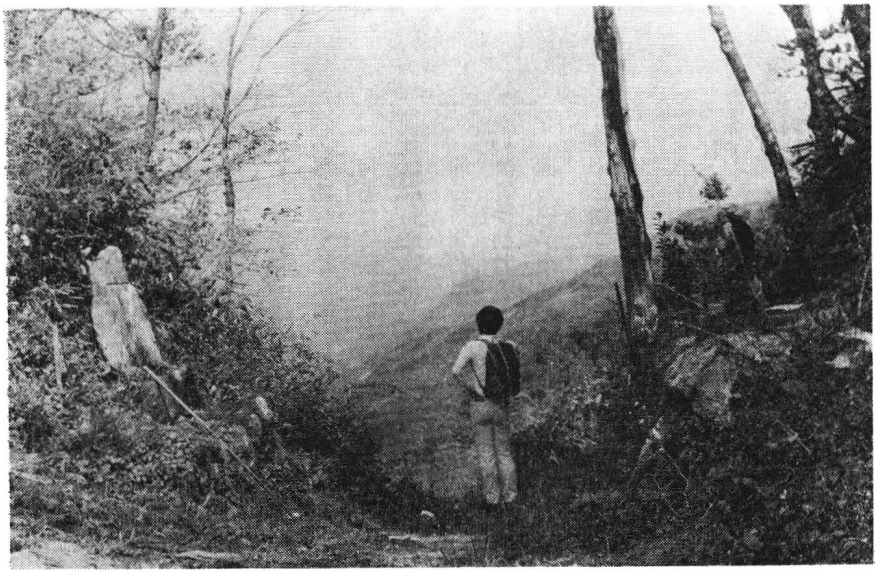
青崩峠（あおくずれ）

「私が十三歳のときの春でした。明け方、父母に連れられ、背にかいこ（養蚕用のまゆ）を背負って、初めて国境の青崩峠を越えました。和田（長野県南信濃村）のまゆ問屋に、かいこを卸すための峠越えでした。帰りに青崩れにさしかかったころは、夕闇が迫り、峠には霧がかかっていました。私は足が棒のようになってクタクタでした。ちょうどそのときでした。霧の中から背に米俵を積んだ馬二頭が、突然、現れました。馬子が息を長くひっぱって、馬子唄を歌いながら、ゆっくりと峠を登ってきました。そのしみわたるような馬子唄が、いまでも忘れられません」

「西浦の祭り」の別当、高木英郷さん（六十一歳・磐田郡水窪町西浦）は、祭りのことを話しながら、約五十年前の昭和初期、西浦谷から青崩峠を越え、信州へ向かった当時をなつかしみながら、しみじみとこう語った。

伊那谷に住む詩人、武田太郎さん（四十九歳・長野県飯田市追手町一の四四）は「遠山谷（長野県下伊那郡にある天竜川の支流、遠山川に沿って開けた峡谷）には、伊那谷文化より遠州文化が早く入り、それには青崩峠の果たす役割が大きい。戦国時代の上杉謙信、武田信玄などが築いた北陸文化が消え、近世においては徳川文化を柱とする太平洋側の影響力が出てきましたが、その文化の担い手のひとつに青崩峠があげられます」と青崩峠の歴史的役割を指摘している。

天竜川をたて軸に花がパッと咲いたように、晩秋から新春にかけて行われる一群の祭事は、宗教的には修験道との関係が深く、熊野を出発点として北陸道をとるとき、天竜川に沿って北上したことが考えられるという。その際、信遠国境の青崩峠が、伝播（でんぱ）経路として利用された可能性は高い。



歴史を秘めた青崩峠も，いまは訪ねる人もなく，忘れられようとしている。

静岡・長野県境にある青崩峠（標高一、〇八二メートル）。浜松市と長野県飯田市を結ぶ国道１５２号（総延長百四十キロ）は、この峠付近の五キロを残して、工事はストップしたままとなっている。

国道１５２号は遠州側で信州街道といい、信州側で秋葉街道という。遠信古道ともいわれ、十四世紀初め、遠州見付（現在の磐田市）で毎年、人身御供を要求していた妖怪を退治し、また自らも重傷を負って、帰り着いた光前寺（長野県駒ヶ根市）で果てた、しっぺい太郎の伝説で親しまれる早太郎（犬の名前）もこの峠を越えた。

一五七二年十月（新暦では十一月）、武田信玄が約三万の兵を率いて上洛の途次、遠州を勢力圏とする徳川勢を攻略するのに利用したのもこの峠であった。

また戦前、豊橋方面からやって来た製糸工場の募集人が、信州街道を通って青崩峠を越え、南信濃村や上村で女工さんを募り、まとまったところで一団となって、豊橋方面に連れて行かれた。水窪谷や西浦谷に住む乙女たちが、信州方面に糸取り女として製糸工場に出稼ぎに行く際、利用された峠も青崩峠であった。

当時、飯田線はまだ開通していない。糸取り女といえば、なまなましい実感をこめて描き出した細井和喜蔵の「女工哀史」で、紡績女工虐待の事実が知られているが、異郷の地で働くことに思

いをはせ、行ってみたものの、その現実に夢破れ、望郷の念にかられながら、病に倒れていった女工さんたちがしのばれる。

山あいの道は、そのもっとも抵抗の少ないルートをとる。秋葉街道は、赤石山脈と伊那山脈との境界である中央構造線がつくる狭隘（きょうあい）な谷間をぬって、中部山岳地帯と太平洋岸を結びつける、最短ルートだった。かつて〝塩の道〟とも呼ばれ、また秋葉講（火伏せの神をまつる秋葉神社への信仰共同体＝秋葉山参り。秋葉神社は、周智郡春野町にある）の信遠を結ぶ唯一の街道としてにぎわい、青崩峠はその際、街道と街道を結ぶ重要な役割を演じた。

青崩峠を初めて訪ねたのは、五十二年十月だった。登山道は荒れ、苔むした石垣に往時がしのばれた。水窪口から徒歩で約二時間、峠に立った。

何となく暗い信州側に比べ、遠州側は明るさに満ちていた。峠には野仏と石碑が建ち、足下からは遠山谷が一直線に北に延び、見上げれば、南アルプスの高峰群が迫る。

峠の信州側は青っぽいガレ（山のガラガラした急斜面）になっていることが峠の名になり、ロマンを誘うが、いまでは訪ねる人もなく、忘れられた峠になっている。

構造線が走り、地盤が軟弱なため、工事が中断したままとなっている国道152号は、〝幻の国道〟といわれ、磐田郡水窪町をはじめ沿線住民から、未開通部分の着工を望む声は強く、敗戦直後から約三十年間、一貫してつづけられてきた。

永年の悲願が実って、五十二年度に調査費五百万円が初めてついた。翌年、七百万円、昨年度は千七百四十万円、今年度は二千二百万円の予算がついて地質調査、航空測量も本格化、ルートは今年度中に決定される。鈴木宣威・同町助役は「六十年ごろには完成するでしょう」と意気込む。

生活のにおいの深くしみついた青崩峠。県境の不通区間開通とともに、数々の歴史を刻んだ青崩峠の〝道の文化〟もまた、急速に塗りかえられていこうとしている。

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.com